

名大医学部学友時報 2026 4

目 次

- | | | | |
|---|------|---|------|
| 1. 祝卒業 | (1) | 7. 令和 8 年 卒業謝恩会 | (12) |
| 2. 教授就任 永橋 昌幸 | (2) | 8. つるま賞授賞式 | (13) |
| 3. 最終講義 秋山 真志 | (4) | 9. 2025 年度 卒業生名簿 | (14) |
| 木村 宏 | (5) | 10. 静岡で働くという選択 伊藤 鑑 | (14) |
| 曾根三千彦 | (6) | 11. 名大から世界へ。国内最大規模のTEDxイベント
「TEDxNagoyaU 2026」のご案内 | (15) |
| 4. 日本体力医学会東海地方会の過去、現在、将来：30 年を振り返って 佐藤 祐造 | (7) | 5 月 4 日 (月・祝)【特別優待のお知らせ】 | (15) |
| 5. プレスリリース 中沢 由華 | (8) | 12. 第 117 回名古屋大学医学部学友大会のご案内 | (16) |
| 6. 学術欄 曾根 淳 | (10) | 13. 編集後記 | (16) |

祝 卒 業



教授就任

病態外科学講座 乳腺・内分泌外科学分野 教授

なが はし まさ ゆき
永橋 昌幸

〈経歴〉

1996 年 3 月 新潟県立新潟高等学校 卒業
2002 年 3 月 新潟大学医学部医学科 卒業
2002 年 5 月 新潟大学医学部附属病院 外科研修医
2004 年 4 月 新潟大学第一外科
(現 消化器・一般外科) 入局
2008 年 3 月 新潟大学大学院医歯学総合研究科 博士課程 修了
2009 年 4 月 バージニア州立大学 腫瘍外科学 ポスドク研究員
2012 年 4 月 日本学術振興会海外特別研究員 兼任
2014 年 5 月 新潟大学大学院医歯学総合研究科 腫瘍内科 助教
2015 年 5 月 新潟大学医歯学総合病院 消化器・一般外科 講師
2021 年 4 月 兵庫医科大学 乳腺・内分泌外科 講師
2021 年 10 月 兵庫医科大学 乳腺・内分泌外科 准教授
2026 年 2 月 名古屋大学大学院医学系研究科 病態外科学講座
乳腺・内分泌外科学分野 教授

〈業績〉

1. Nagahashi M, Komatsu M, Urano S, Kuroiwa M, Takahashi Y, et al. An Acrolein-Based Drug Delivery System Enables Tumor-Specific Sphingosine-1-Phosphate Targeting in Breast Cancer without Lymphocytopenia. *Cancer Res Commun*. 2025;5 (6) :981-993.
2. Nagahashi M, Yamada A, Katsuta E, Aoyagi T, Huang WC, et al. Targeting the SphK1/S1P/S1PR1 Axis That Links Obesity, Chronic Inflammation, and Breast Cancer Metastasis. *Cancer Res*. 2018;78 (7) :1713-1725.
3. Nagahashi M, Takabe K, Liu R, Peng K, Wang X, et al. Conjugated bile acid-activated S1P receptor 2 is a key regulator of sphingosine kinase 2 and hepatic gene expression. *Hepatology*. 2015;61 (4) :1216-26.
4. Liang J¹, Nagahashi M¹ (co-first author), Kim EY, Harikumar KB, Yamada A, et al. Sphingosine-1-phosphate links persistent STAT3 activation, chronic intestinal inflammation, and development of colitis-associated cancer. *Cancer Cell*. 2013;23 (1) :107-20.
5. Nagahashi M, Ramachandran S, Kim EY, Allegood JC, Rashid OM, et al. Sphingosine-1-phosphate produced by sphingosine kinase 1 promotes breast cancer progression by stimulating angiogenesis and lymphangiogenesis. *Cancer Res*. 2012;72 (3) :726-35.

このたび、2026 年（令和 8 年）2 月 1 日付で、名古屋大学大学院医学系研究科 病態外科学講座 乳腺・内分泌外科学分野の教授を拝命いたしました。伝統ある名古屋大学の一員として迎えていただきましたことを大変光栄に存じます。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は 2002 年（平成 14 年）に新潟大学医学部を卒業後、「自らの手で患者さんを救いたい」という思いから外科

医を志し、新潟大学消化器・一般外科に入局しました。一般外科で多くの癌患者さんの診療に携わる中で、現在の医療では救うことが難しい患者さんに数多く出会い、難治癌を克服するためには基礎研究の積み重ねが不可欠であると考えようになりました。そのため大学院では外科病理学を専攻し、癌の進展に関する研究に取り組みました。さらに 2009 年より米国バージニア州立大学に留学し、生化学の研究室で癌における脂質メディエーターの働きに関する基礎研究に従事しました。米国で乳癌研究に携わった経験から、手術のみならず薬物療法や放射線療法を組み合わせた集学的治療によって患者さんを支える乳腺外科に可能性を感じ、この分野を専門とすることを決意しました。帰国後は乳腺・内分泌外科医として診療・研究・教育に携わっております。

近年、乳癌患者数の増加に伴い、乳腺診療の重要性はますます高まっています。名古屋大学乳腺・内分泌外科では、多くの関連病院と連携しながら地域医療を支え、患者さん一人ひとりに寄り添った最善の医療を提供してまいります。治療に難しさを伴う症例に対しても、多職種と協力しながら粘り強く解決策を探る姿勢を大切にしていきたいと考えています。名古屋大学に受け継がれてきた診療の歩みを尊重しつつ、診療体制の充実に努めてまいります。

研究面では、乳癌の根治を目指し、基礎研究、トランスレーショナル研究、臨床研究を三本柱として取り組んでまいります。基礎研究では、これまで取り組んできた脂質メディエーター研究を基軸に、癌細胞や免疫微小環境の制御に関わる分子機構の解明を進めます。トランスレーショナル研究では、生検や手術検体などの臨床検体を活用し、患者由来オルガノイドや患者由来癌移植マウスモデルを用いて薬剤耐性などの課題に取り組めます。臨床研究では、脂質メディエーターを標的とした新規薬剤の臨床応用や、人工知能を活用した腫瘍外科診療の開発を進めていきたいと考えています。

そして大学の重要な使命は、次世代を担う人材を育てることです。医学生や若い医師の皆さんには、日々の学

びや診療の中で疑問を持ち、自ら考え、挑戦し続けてほしいと願っています。医学は日々進歩していますが、私たちが解明できていることは生命現象のほんの一部に過ぎません。だからこそ未知の領域に挑み続けることが重要であり、「なぜだろう」と考え続ける姿勢が未来の医療を切り拓くと考えています。私たちは臨床で生まれた疑問を研究につなげ、その成果を再び患者さんへ還元していく姿勢を大切にしていきたいと思います。

本講座が、学生や若手医師にとって「ここで学びたい」「ここで成長したい」と思える場所となり、互いに刺激し合いながら新しい医療を創り出していける場となるよう努めてまいります。医療の道は決して平坦ではありませんが、乳腺外科医は患者さんの人生に正面から向き合い、寄り添いながら共に歩いていくやりがいのある仕事です。将来医療を志す学生の皆さんが、大きな夢と誇りを持って歩いていけるよう、全力で支えていきたいと考えております。

微力ではございますが、皆様のご指導とご支援を賜りながら、一步一步着実に努めてまいり所存です。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

永橋教授就任インタビュー

—— 心境と抱負

伝統ある名古屋大学で仕事ができることを大変光栄に思っています。名古屋大学は診療・研究ともに高いレベルを誇り、素晴らしい医療が行われている環境です。その一員として良い医療を提供していきたいと考えています。私自身の専門は乳がんであり、今後も乳がん患者さんの診療に取り組んでいきたいと思っています。また、乳腺・内分泌外科では乳がんだけでなく甲状腺・副甲状腺や副腎などの診療も行っており、これまで名古屋大学で築かれてきた診療体制や伝統を大切に引き継いでいきたいと考えています。さらに、恵まれた研究環境を生かして新しい乳がん治療の研究を進めるとともに、情熱ある若手医師や学生が活躍できる環境づくりにも力を入れていきたいと思っています。

—— 研究に進まれたきっかけ

私はもともと消化器を含む一般外科に所属し、がんの手術に携わってきました。がん手術では、これまでの病理学的研究で明らかになった腫瘍の広がり方を踏まえ、術前画像診断をもとに切除範囲や術式を決めます。再発

なく治療するためには腫瘍を取り残さないことが大原則であり、そのためには病理学の理解が不可欠であると考え、大学院では病理学を学びました。手術で肉眼的に見た腫瘍と顕微鏡で観察する病理像を対比し二つの見方を重ねることで、がんを立体的に理解できるようになりましたが、さらにその背景にある生化学的なメカニズムを知りたいと考えるようになりました。その後、米国の生化学研究室に留学し、脂質シグナルの視点からがん研究に取り組みました。こうした経験を通じ、臨床・病理・生化学的メカニズムを結び付けることの重要性を実感しています。

—— ご自身の研究分野の魅力

私の研究では、がんの進展、特にリンパ節転移に関わる脂質シグナルに着目しています。脂質はホルマリン固定標本の作製過程で失われてしまうため、病理学的に直接観察することが難しく、患者検体における役割はこれまでほとんど分かっていませんでした。そこで脂質そのものではなく、それを産生する酵素に注目して解析を進めたところ、特定の脂質シグナルが高い患者さんではリンパ節転移が多いことが分かってきました。脂質というこれまであまり注目されてこなかった視点からがんを捉えることで、新しい発見につながる点がこの研究の大きな魅力だと感じています。また、研究を通じて培ってきた、がんを分子レベルで理解する視点は乳がん治療を考える際にも役立っており、臨床と研究とが互いに活かし合える点にも魅力を感じています。

—— 学生へのメッセージ

乳腺診療の魅力を知ってほしいと思います。乳がんは女性に最も多いがんの一つですが、約 9 割の患者さんは根治が可能であり、多くの方を治療によって助けることができます。診療の中で患者さんに喜んでいただける機会が多いことは、大きなやりがいです。また乳がんは比較的若い世代にも多く、子育てや仕事を続けながら治療に向き合う患者さんを支えることができる点も、この分野の大きな意義だと感じています。一方で、まだ治すことが難しい患者さんもあり、研究を通じて将来さらに多くの方を救える可能性があります。臨床と研究の双方に大きなやりがいのある分野ですので、興味のある学生はぜひ気軽に声をかけてください。

最 終 講 義

表皮の分化・バリア形成のメカニズムの解明と
表皮分化疾患の治療への挑戦

運動・形態外科学講座 皮膚科学分野 教授

あきやま まさし
秋山 真志

この度、令和 8 年 3 月末をもちまして名古屋大学大学院医学系研究科を退職いたします。それに先立ち、令和 8 年 2 月 19 日、15 時から鶴舞キャンパス基礎研究棟（講義棟）4 階 第 4 講義室で最終講義を行わせて頂きました。

皮膚科医、皮膚科学の研究者としての私のライフワークは、皮膚表面の表皮の角化機序の解析と表皮分化疾患の病因、病態の究明と治療です。本最終講義では、このライフワークについての私の 40 年近い取り組みについてお話しいたしました。本講義は、「Ⅰ 魚鱗癬との出会いから、出生前診断、脂質異常による病態の解明」、「Ⅱ 表皮のバリア機能障害 / 表皮細胞の分化異常による多様な疾患の病態解明と予防、治療へ」、「Ⅲ 国際新病名「表皮分化疾患」の提唱と治療への挑戦」の 3 部構成でした。まず、「Ⅰ 魚鱗癬との出会いから、出生前診断、脂質異常による病態の解明」ですが、皮膚科医になりたての私が遺伝性の難治性皮膚疾患である先天性魚鱗癬の新生児に出会ったことが、研究者としての私の方向性を決めました。表皮の分化（角化）の仕組みの解明は、まさに、皮膚科医、皮膚科学研究者の仕事であると確信し、私はまず初めに、根本的治療法のない、最重症の表皮分化疾患である道化師様魚鱗癬の出生前診断を目指しました。1992 年から 1994 年まで Seattle の University of Washington で出生前診断と並行して、表皮の発生の研究を始めました。帰国後、本邦での胎児皮膚生検検体の電顕的観察による魚鱗癬の出生前診断を確立いたしました。2005 年に *ABCA12* が道化師様魚鱗癬の疾患関連遺伝子であることを明らかにし、道化師様魚鱗癬の遺伝子検査による出生前診断を可能としました。その後、北海道大学皮膚科、名古屋大学皮膚科において、表皮脂質の要であるセラミドの異常による多数の表皮分化疾患モデルマウスを作成し、患者皮膚とモデルマウスの解析を通じて、皮膚最表面の角層におけるセラミド・バリアの形成メカニズムと表皮セラミドの異常による表皮分化疾患

の発症機序の多くの部分を解明致しました。

「Ⅱ 表皮のバリア機能障害 / 表皮細胞の分化異常による多様な疾患の病態解明と予防、治療へ」では、表皮分化疾患には分類されてはいませんが、表皮の分化の異常が関連している疾患群についての私の研究の 4 つの話題、① *FLG* バリエーションとアトピー・アレルギー性疾患、② *LIPH* バリエーションと先天性乏毛症・縮毛症、③ *ADAM10* バリエーションと網状肢端色素沈着症、④ 自己炎症性角化症について、述べさせて頂きました。

「Ⅲ 国際新病名「表皮分化疾患」の提唱と治療への挑戦」では、体細胞復帰変異によるモザイク健常皮膚部分から採取した患者自身の健常表皮細胞を培養して作成した自家健常培養表皮シートを用いた表皮融解性魚鱗癬の治療への最近数年間の挑戦について述べました。さらに、4 年前からは、魚鱗癬を含む、表皮分化疾患の国際分類、国際病名の抜本的改訂のために集まった、世界各国のエキスパートから成るタスク・フォースのコア・メンバーの一人として、国際病名改訂に取り組んで参りました。そして、昨年、魚鱗癬をはじめとする遺伝性表皮分化障害による全ての疾患の国際分類・病名を、表皮分化疾患（Epidermal Differentiation Disorders）として包括的に改訂いたしました。この改訂により、より広い範囲の表皮分化疾患に対応可能な堅牢な命名システムが構築され、さらに、人名や、「魚鱗癬」、「道化師様」などの軽蔑的とみなされる用語も疾患名から削除できました。この疾患関連タンパク質の機能による表皮分化疾患のグループ化は、各表皮分化疾患に対する治療標的の明確な特定と、他の疾患のために開発された薬剤の repurposing の可能性に繋がることが期待されます。

名古屋大学には 15 年半お世話になり、研究を大きく進めることが出来ました。これは学友会の諸先生をはじめ、多くの教職員の皆様、皮膚科学分野の皆様、お一人お一人のご助力あつてのことと、心より感謝いたしております。改めまして、心より御礼申し上げます。



最 終 講 義

From Bedside to Bench, and Back Again

微生物・免疫学講座 ウイルス学分野 教授

きむら ひろし
木村 宏

3 月 6 日、鶴舞キャンパス基礎研究棟第四講義室にて最終講義を行いました。私は 1985 年に名古屋大学医学部を卒業し、小児科医として臨床研修を行った後、大学院で研究を始めました。その後、米国 NIH/NIAID に留学してウイルス学研究に取り組みました。1997 年に帰国後は、名古屋大学小児科および大学院医学系研究科ウイルス学分野で教育・研究に従事してきました。2012 年から同分野の教授として教室を主宰し、研究科長など大学運営にも携わりました。

私の研究は大きく三つのテーマから成り立っています。第一は中枢神経系感染症、第二は母子感染、第三は難治性 EB ウイルス関連疾患です。本講義では時間の関係で、母子感染と難治性 EB ウイルス関連疾患に限り紹介いたしました。私の学位論文では、当時開発されたばかりの PCR 法を用いて新生児ヘルペス患者から単純ヘルペスウイルス DNA を検出する研究を行い、母子感染症である新生児ヘルペスの診断法の発展と病態解明に貢献することができました。また、同じく母子感染症の一つである先天性サイトメガロウイルス感染症にも焦点を当て、研究を進めてきました。疫学、診断、治療に関する研究を進めるとともに、近年は次世代 mRNA 技術によるサイトメガロウイルスワクチン開発にも取り組んでいます。

私の研究の中心となったのは、慢性活動性 EB ウイルス感染症 (CAEBV) をはじめとする EB ウイルス関連疾患の研究です。この研究は臨床で経験した患者さんを契機として始まりました。当時この疾患は診断法や治療法が確立しておらず、病態も十分には理解されていませんでした。そこで私はリアルタイム PCR 法を用いた EB ウイルス DNA 定量法を世界で初めて確立し、EB ウイルス関連疾患の診断や治療効果判定に有用であることを示しました。この方法はその後臨床検査として普及し、現在では保険診療として広く用いられています。さらに CAEBV の臨床研究を進め、T 細胞型と NK 細胞型という二つの病型が存在すること、発症年齢や血小板減少が予後因子となることも明らかにしました。造血幹細胞移植を含む治療研究では、移植前のウイルス量が予後の推定や治療効果の判定に有用であることも示しました。

基礎研究では、EB ウイルス感染細胞を同定する技術の開発、変異 EB ウイルスを用いた遺伝子機能解析、動物モデルの確立などを行い、病態の理解を進めてきました。さらに包括的ゲノム解析により、CAEBV では DDX3X などのドライバー遺伝子変異が認められること、欠損ウイルスが腫瘍化に関与していることを明らか

にし、この疾患が単なる感染症ではなく腫瘍性疾患として理解されるべきであることを示しました。これらの研究により、CAEBV は現在では EB ウイルス関連リンパ増殖性疾患として国際的にも認識されるようになりました。

また、私は診療ガイドラインの作成にも関わり、EB ウイルス関連疾患の診療の標準化にも取り組んできました。このように臨床研究と基礎研究を往復しながら、研究成果を医療に還元することを目標としてきました。

講義タイトルの「From Bedside to Bench, and Back Again」は、私が米国留学中に指導を受けた故 Stephen Straus 先生が生前によく用いられていた言葉です。優れた研究医は、患者に寄り添いながら医学的課題を見いだし、その答えを研究によって探究し、再び患者のもとへと届けます。私自身、小児科医として臨床で抱いた疑問を出発点に、それを基礎研究で解明し、再び臨床に還元することを目指してきました。本講義では、研究医としての歩みを振り返るとともに、若い世代の皆さんに臨床と研究の両方に挑戦してほしいという思いをお伝えしました。

最後に、これらの研究は多くの共同研究者、教室員、大学院生、そして臨床の現場とともに診療に携わってきた先生方の協力によって進めることができました。また、研究にご理解とご協力をいただいた患者さんとそのご家族にも深く感謝申し上げます。この場を借りて、これまで支えてくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。



最 終 講 義

耳鼻咽喉科・感覚器外科の世界に生きて

頭頸部・感覚器外科学講座 耳鼻咽喉科学分野 教授

そね みちひこ
曾根 三千彦

耳鼻咽喉科が携わる疾患は、聴覚や平衡感覚、嗅覚、味覚などの感覚器に加えて嚥下や音声言語にも関与し、その機能障害は QOL に大きく関わります。耳は非常に小さな器官です。特に内耳は、聴覚と平衡覚を司る微細ながら緻密な構造を有しています。この「小さな宇宙」の魅力を解き明かすべく研究に従事してきました。大学院時代は、モデルマウスを用いて自己免疫性内耳障害の病態把握を試みまし。博士号取得後、世界有数のヒト側頭骨標本を有する米国ミネソタ大学に留学しました。クリニカルチャートから聴力検査データも含め臨床症状と対比できるヒト側頭骨研究から得られる多くの知見に、動物実験では味わえない興奮を覚えました。

帰国後、動物実験を継続しつつ生体の内耳評価法を模索していましたが、骨包に囲まれた内耳へのアプローチは容易ではありません。近年遺伝子解析による内耳疾患の解明も進歩してきましたが、MRI 画像を応用した内耳障害の病態解明も大きく発展しました。

感音難聴の代表的な内耳疾患として、突発性難聴とメニエール病があります。放射線科の長縄慎二教授との共同研究で、原因不明な高度難聴を生じる突発性難聴の病態を、血液迷路関門障害の観点から評価しました。今まで、メニエール病の病態である内リンパ水腫は側頭骨標本でしか確認できませんでしたが、MRI 画像を用いて生体での可視化が可能になりました。この MRI 内リンパ水腫評価法を応用し、生理学的検査所見との相関性や内リンパ水腫の存在意義、メニエール病の病態解明を進めてきました。その結果、メニエール病では前庭内リンパ水腫の存在意義が高いこと、内耳への音吸収エネルギー異常と蝸牛へのエネルギー伝導障害により聴力検査にて低音域気導と骨導に差が出現すること、内リンパ水腫形成に伴い内耳圧が上昇し、血液迷路関門障害発症が聴力悪化やめまいの発作と関連すること、めまい発作時のライスネル膜破裂説を否定される所見も得ました。さらに、内リンパ水腫形成に先立つ血液迷路関門障害や内リンパ水腫を伴わないメニエール病の病態も把握することができました。メニエール病以外の多くの耳疾患にも内リンパ水腫が確認され、内リンパ水腫関連疾患として疫学のおよび治療的観点から分類を提唱しました。

内耳 MRI 画像による内リンパ水腫の視覚化を報告して以来、多数の内リンパ水腫関連疾患の症例をご紹介いただきました。難治性のめまい症状に悩む人々を診察してきた経験から、障害を受けた前庭機能の改善のためには、新たな治療法の開発が必要であると強く感じていました。環境労働衛生学教室の加藤昌志教授との共同研究にて、100 Hz の軽微な音刺激が平衡感覚に効果がある可能性から、めまい症状に悩む難治性メニエール病例に応用したところ、前庭（耳石）機能に好影響を与えることが明らかになりました。その後対象を迷路炎や加齢性前庭機能低下に広げ、低周波数音刺激が歩行時の重心動揺安定化を促進することも把握しました。無症状の内リンパ水腫症例に対し治療的介入を行うべきか判断するためには、内リンパ水腫存在の病的意義を把握する必要があります。低周波数音刺激後の前庭機能の改善効果は、病的意義評価の手法としても有用です。

在任中、感覚器外科として多くの耳科手術を行ってきました。その中で、人工内耳治療はその適応拡大も含めて目を見張る進歩を遂げています。人工内耳手術を受けた先天性高度難聴児の成長や、後天性に失聴した方が聴覚を再獲得して喜ぶ姿に、自分の存在価値を見出すことができました。小さな領域であっても、覗いてみて初めて広い世界が広がっていることが分かります。究めるまでには至りませんでしたが、耳科学を通じて学問の魅力を味わえたことを幸せに思います。



第117回 名古屋大学医学部 学友大会のご案内

春暖の候、皆様にはお変わりなくご活躍のことと存じ、心よりお慶び申し上げます。

さて、このたび今年度の学友大会委員長を仰せつかり、現在、多くの先生方と協議を重ねながら準備を進めております。今回も多数の会員の皆様にご参加いただき、盛大な会となりますよう念じております。

つきましては、万障お繰り合わせのうえ、ぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。

2026 年 4 月

第 117 回名古屋大学医学部学友大会 委員長 佐藤 公治
(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長/名古屋大学整形外科同門会 会長)

日 時

2026 年 10 月 10 日 (土) 14 時 15 分～

場 所

名古屋観光ホテル 2 階 曙の間

〒460-8608 名古屋市中区錦一丁目 19 番 30 号
TEL 052-231-7711

参加費

一般会員 16,000 円
医員 (研修医を含む)、大学院生 8,000 円
会員のご同伴者 8,000 円
非会員 17,000 円

申込期間

令和 8 年 8 月 31 日 (月) まで

行 事

1. 総 会

2. 記念講演

講師 福岡 伸一 先生

京都大学卒および同大学院博士課程修了。ハーバード大学研修員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学教授・米国

ロックフェラー大学客員教授。

<https://www.fukuokashinichi.com>

演題：いのちの動的平衡 (仮題)

3. 懇親会

・ジャズバンド演奏 WHY ジャズ楽団

塩之谷香先生 (塩之谷整形外科 理事長)

・名古屋大学応援団演舞



【一筆啓上お願い】

大会誌に一筆啓上欄を設けております。この企画に、関連病院、支部、クラス会、医局よりご賛同を賜りますようお願いいたします。

編集後記

春の陽気が心地よい季節となりました。この 4 月号から学友会時報部の学生チーフを務めさせていただきます、医学部 4 年の相地竜壺と申します。

振り返れば、バドミントン部の先輩に誘われて時報部に入部してから、早いもので 2 年が経ちました。バドミントン部ではシャトルを追いかけ、日々に明け暮れておりますが、次第に時報の持つ影響力の大きさを実感しています。

歴史ある時報のチーフを務めるにあたり、身が引き締まる思いですが、梶山先生をはじめとした諸先生方、事務局の皆様、そして何より時報部員一丸となって、より良い時報を作り上げていこうと思います。読者の皆様におかれましても、時報の内容や特集へのご意見、ご感想などございましたら、ぜひお気軽にお寄せください。また、会員の皆様からの寄稿も随時募集しております。

今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

(相地 竜壺)

部 長	梶山 広明	6 年	小野 瑞稀	阪口 竜佑	松井のぞみ	森本 崇嗣
委 員	芳川 修久	5 年	安藤 優里	坂本 鈴奈	チーフ 相地 竜壺	味村 柊哉
	玉内 学志	4 年	天野 祥汰	佐野 文哉	橋元万由子	村松舞奈美
学友会事務局	中島 千夏	3 年	櫻井あんり	高木 彰吾	原田理紗子	平田 紗菜

【時報部の e-mail アドレスのお知らせ】

本時報に対するご意見、ご感想、情報等は、numed.jiho@gmail.com へお寄せください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

発 行 所 〒466-8550 名古屋市中区鶴舞町 65

名大医学部学友会

編集発行人 時報部長 梶山 広明

印 刷 所 名古屋市中区千代田 5-11-16

株式会社山誠社

購読料 (年 7,000 円 会費に含む) 毎月 22 日発行

学友会 振替口座 (00880 - 7 - 3838)

電 話 (052) 744-2512 (直通)

F A X (052) 741-7676

メール gakuyuukai@med.nagoya-u.ac.jp